

高知県春野町

芳原城跡 III
YOSIHARA

—第5次発掘調査報告書—

芳原城跡

1995年3月

春野町教育委員会

芳原城跡 III

—第5次発掘調査報告書—



芳原城跡（東より）



調査区近景（上空より）

序

土佐戦国の時代は、この春野町には弘岡の吉良氏を先頭に南を森山氏、東に木塚氏・大河と小山をはさんで南の海に面して小島氏が勢力を張っていました。その豊かな土地に外から津野氏や本山氏が目を向け幾度となく小競合が繰り返されました。そんなとき自分の領地を守るための砦に、いろいろ工夫が凝らされたにちがいありません。

この芳原城も、その時代に即して築城技術の先端を駆使した跡が現われ人々を驚かせ、日本の城の歴史に新事実の証として注目をされました。

時代は流れ、この度の農地整備を進めるに当たり、この城跡も姿を消さざるを得なくなり、昭和58年度から、4次に亘り発掘調査が進められてきました。この度城門に当ると思われる部分の調査が行われました。結果、枠形の構造や馬出し等の虎口としての性格を現わしました。

この調査に当り土地所有者をはじめ隣接地主の皆様方のご理解と多くの方々のご協力をいただきました。

また調査担当者として、高知県教育委員会文化財保護室・高知県埋蔵文化財センター松田直則先生をはじめ諸先生方から多大のご尽力をいただきました。

調査にあたり、お世話になりました皆様方に、あらためてお礼を申しあげ言葉はたりませんが序といたします。

平成7年3月

春野町教育長 岡内 勉

例　　言

1. 本書は、春野町教育委員会が平成5年度に実施した個人農地開発にかかる芳原城跡の虎口部分の発掘調査報告書である。
2. 城跡は、高知県吾川郡春野町芳原に所在する。
3. 発掘調査は、平成5年4月～6月に実施し、同年8月から平成7年3月まで整理作業・報告書作成を行った。
4. 調査は、春野町教育委員会が主体となって行い、高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員松田直則が発掘調査から整理作業・報告書作成まで担当し、調査は同センター調査補助員竹村三菜、整理作業は吉本睦子に協力を得た。事務総括は、春野町教育委員会山崎毅(公民館長)・中山朋之が行った。
5. 発掘調査・報告書作成において池田誠・千田嘉博・中井均・前川要の各氏に御教示を頂いた。記して感謝する次第である。尚城跡の縄張図については池田誠氏の作成による。
6. 本書の執筆・編集は松田直則が行った。
7. 調査にあたっては、春野町文化財審議委員会・高知県教育委員会文化振興課・地元関係者に全面的な協力を頂いた。関係者各位に厚く御礼申し上げたい。
8. 出土遺物の資料は、春野町教育委員会が保管している。尚遺物の注記は、93-2 YCとしている。

報告書要約

1. 遺跡名 芳原城跡 遺跡番号340016 地図番号NO.23-5 (土佐・吾川)
2. 所在地 高知県吾川郡春野町芳原
3. 立地 吾南平野中央部の独立丘陵 標高32m
4. 種類 戦国時代 平山城
5. 調査主体 春野町教育委員会
6. 調査契機 個人農地開発に伴う発掘調査
7. 調査期間 平成5年4月10日～6月30日
8. 調査面積 493m²
9. 検出遺構 虎口遺構 掘立柱建物跡 堀切 溝跡 ピット群
10. 出土遺物 土師質土器 皿・杯
貿易陶磁器 青磁・白磁
国産陶器 備前焼
11. 要約内容 個人農地開発に伴い、前年度一部確認していた虎口部分を中心に調査を実施し全体の様相を明らかにすることができた。検出遺構は、虎口部分で掘立柱建物跡3棟、溝跡、階段状遺構、虎口の南側で堀切を検出した。建物跡の1棟は、城門と考えられその後方には舟形の空間を持っている。出土遺物は、調査範囲が狭く包含層出土の細片が多いため遺構の年代を決めるまでにはいたらない。虎口は、中世を通じて均一に変化発達したものではなく戦国時代後半から織豊期にかけて急激に発達したと考えられており、今回の虎口遺構の構築時期が問題となる。
第1～4次調査で出土した遺物から、芳原城跡の機能した時期は15世紀中頃から16世紀中頃前後と考えられている。虎口遺構も機能した時期で新しく考えても16世紀中頃であり、全国的に見ても古い基準資料になると考えられる。今回の虎口検出で、畿内・東海地域に遅れることなく独自の城の発達が、中世の土佐で重ねられていたことを証明する貴重な資料である。

本文目次

巻頭図版

序

例　言

報告書要約

目次（本文目次／挿図目次／写真図版目次）

第Ⅰ章　調査に至る経過.....	1
第Ⅱ章　中世吾南平野の歴史的環境.....	2
第Ⅲ章　城跡の概要.....	5
第Ⅳ章　調査の概要.....	8
第1節　調査の方法.....	8
第2節　第1～4次調査の概要.....	8
第3節　基本層序.....	12
第Ⅴ章　調査の成果.....	15
第1節　検出遺構.....	15
第2節　出土遺物.....	20
第VI章　考　察.....	21

挿図目次

- 第1図 春野町位置図
- 第2図 春野町の城館跡分布図
- 第3図 芳原城跡概要図
- 第4図 調査区遺構全体図
- 第5図 調査区エレベーション図
- 第6図 調査区土層断面図
- 第7図 S B8・10実測図
- 第8図 S B9実測図
- 第9図 階段状遺構・S D9実測図
- 第10図 出土遺物実測図
- 第11図 芳原城跡・捨ヶ森城跡繩張り図

写真図版

- 卷頭図版1 芳原城跡（東より）、調査区近景（上空より）
- 図版1 調査後全景（南東より）
- 図版2 調査前状況（北西より）、同上（北より）
- 図版3 調査前状況（南より）、調査区設定状況（南東より）
- 図版4 調査区設定状況（北西より）、調査状況（西より）
- 図版5 調査区全景航空写真、調査区全景（南東より）、堀切・IV-1平坦部（南東より）
- 図版6 虎口部航空写真、虎口部（南西より）、S B8・階段状遺構
- 図版7 虎口部全景（北より）、S B8・階段状遺構
- 図版8 S B9、S B10
- 図版9 虎口部東西土層断面（北より）、虎口中央部土層断面（北より）
- 図版10 虎口東部土層断面（北より）、虎口西部土層断面（北東より）
- 図版11 虎口中央部土層断面（北西より）、虎口斜面部土層断面（南西より）
- 図版12 斜面部土層断面（南より）、堀切・IV-1平坦部土層断面（西より）
- 図版13 堀切土層断面（西より）、同上（南西より）
- 図版14 IV-1平坦部南北土層断面（南より）、IV-1平坦部東西土層断面（西より）
- 図版15 土師質土器（外面）、同上（内面）
- 図版16 貿易陶磁器（外面）、同上（内面）

第Ⅰ章 調査に至る経過

春野町は、高知県中央部に位置している。吾南平野を形成する中央低地は、県下でも主要な農業地帯として知られているところである。地理的に高知市の西隣りに位置する町で、最近では高知市のベッドタウンとして宅地造成等の諸開発が多いところである。しかし主要産業は、米作であるが、高知市に近いことから春野町は施設園芸作物の栽培も盛んに行われており、都市近郊型農業を目指している。

芳原城跡が所在する西分・芳原地区周辺においては、低湿地部分が多く農業生産が低く土地基盤整備が待ち望まれていた。昭和54年に芳原城跡を含む地域の農業用地120ヘクタールを開発した。その段階で、芳原城跡詰・二ノ段をはじめ丘陵部分は計画変更で現状保存された。しかし城跡に伴う堀状地形部分は、圃場整備の範囲内で開発にともない発掘調査が実施された。堀跡の遺構は明確に検出できなかったが、遺物として明応2年(1493)銘が残る護符の他、大量の木製品が出土している。この調査で、城郭の機能した時期等貴重な資料として全国的に注目された。県営圃場整備後周辺地域の環境変化に伴い、施設園芸作物の栽培等も進み農業経営及び後継者の確保が望まれはじめた。

芳原城跡の詰・二ノ段を中心として土地を所有している地主から、土地所有部分を削平しハウス栽培をしたい旨の届けが平成元年春野町を経由して高知県教育委員会文化振興課に提出された。昭和58年の県営圃場整備事業でも計画変更で城跡部分を保存している経過から、開発計画変更について町教育委員会及び県文化振興課は協議を申し入れ再考を要請した。しかし地主の開発に対する強い意向から、発掘調査を実施した結果に基づき再度協議することになった。発掘調査は、詰から二ノ段にかけて平成2~4年度にかけて春野町教育委員会が高知県教育委員会の指導を受け実施された。



第1図 春野町位置図

調査成果は、平成5年3月に「芳原城跡II-第2~4次発掘調査報告書」として刊行されている。第4次調査の段階で、二ノ段東部において虎口遺構の一部を検出した。虎口遺構は、枡形を有し全国的にも貴重な資料となることが解明され、町教育委員会としては虎口遺構の全面的な解明を目的として平成5年第5次調査を行うことを決定了。調査主体は、引き続き教育委員会が行い、発掘調査の指導は高知県文化財団埋蔵文化財センターに協力依頼を行い実施した。

第Ⅱ章 中世吾南平野の歴史的環境

春野町の位置する地形は、鷺尾山をはじめとする東西帯状に伸びる北部山地と、吾南平野を形成する中央低地や南部丘陵からなっている。この吾南平野は、戦国時代吉良氏支配の後本山・一条氏の抗争の場となる。土佐を統一するには、地域的にも吾南平野を支配することが重要な意味をもっていたと考えられる。さらに本山氏が支配した後も長宗我部氏と激しい戦いのあった場所として知られている。この吾南平野で繰り広げられた戦国の様相を、中世城郭を含め考古学の発掘調査の成果に基づき歴史的環境を述べることにする。

室町時代の14世紀後半頃、守護代細川氏は南国市田村に居館を構え、土佐での守護領国体制を確立している。その体制下における吾南平野の支配は、吉良・木塚・森山・小島氏などの国人が当時支配圏を広く持っていた有力国人である大平氏を支えて存在していた。さらに大平氏を介して守護代細川氏の傘下にいたと考えられる。吾南平野を支配した各国人は、それぞれ居城として、吉良氏は弘岡に所在する吉良城跡、木塚氏は多くの文献で西分所在の木塚城跡か芳原城跡、森山氏は森山城跡か秋山城跡、小島氏は西畠城跡または仁ノ城跡が推定される。芳原城跡は木塚氏の名前がみえるが、その他に大日本資料では鷺尾氏の名前がみえ、土佐国古城記では片山修理大夫や土佐国古城略史では片山氏と新たに弘田伊賀守が登場してくる。しかし現段階では、芳原城跡の城主は不明確で、今後発掘調査成果や周辺の縄張り研究も含めた総合的な研究で検討していくなければならない。

春野町には、中世城郭が芳原城跡他13城跡確認されている。この中で、一部発掘調査が実施されている城跡は、吉良城跡・木塚城跡・芳原城跡である。吉良氏の居城である吉良城跡は、標高111.2mの北嶺と111.5mの南嶺に主郭を持つ県内では大規模な城跡である。北嶺詰部分の調査が昭和59年度に行われており、掘立柱建物跡・櫛列状ピット・集石群等が検出されている。縄張りを見ると畝型豊堀群や堀切・豊堀などが要所にみられ縄張りとしては規模が大きい。詰部分の発掘調査では、出土遺物が少ないが輸入陶磁器などをみると16世紀後半の時期を考えることができる。昭和60~62年度にかけて土居の谷・大谷地区の谷平地部分調査が実施されている。土居の谷地区は、小字名に「土居」の名称が冠されていることから長宗我部地検帳に記載されている「御土居」の所在地と推定されていた。土居の谷地区では、小規模な調査であったが石垣遺構及び柱穴群が確認できており、出土遺物にしても輸入陶磁器等が確認でき屋敷の一部分の可能性もある。吉良氏は永正年間の末から大永年間頃南下する本山氏と西から勢力を伸ばす一条氏に挟まれ吉良氏は滅びている。その後本山氏がこの地を支配するが間もなく長宗我部氏が吾南侵攻をはじめ永禄6年(1563)本山氏は勢力を本山に引き揚げ、吾南平野は長宗我部氏の支配下にはいることになる。吉良氏が滅亡しても、本山氏や長宗我部氏が名家である「吉良」を名乗りこの地を支配している。吉良城跡が本山・長宗我部氏が支配した段階で



No.	名 称	種 別	No.	名 称	種 別
1	芳原城跡	城館跡	8	西畠城跡	城館跡
2	捨ヶ森城跡	城館跡	9	森山南城跡	城館跡
3	内ノ谷城跡	城館跡	10	森山城跡	城館跡
4	光清城跡	城館跡	11	秋山城跡	城館跡
5	東諸木城跡	城館跡	12	木塚城跡	城館跡
6	雀ヶ森城跡	城館跡	13	吉良城跡	城館跡
7	仁ノ城跡	城館跡	14	八幡宮西ノ城跡	城館跡

第2図 春野町の城館跡分布図

居城としていたことは、ほぼ信用できるものとして、もともとの吉良氏がこの城を構築していたかどうかは疑問が残る点である。

木塚城跡であるが、芳原城跡の北側約2km地点で西分に所在する。昭和63年に城跡の斜面部分の発掘調査と城跡の測量調査が実施されている。名前のとおり城主は、多くの文献で木塚氏とされている。調査報告書では、長宗我部地検帳の記載内容や周辺の土居の様相、さらに城跡の規模等で芳原城跡が木塚氏の拠点ではないかと推論している。芳原城跡は、58年度に1次調査として堀状地形部分の調査が実施されている。当時本県において、中世の多量の木製品と土器類が出土したことで城郭内での生活の様相の一端を掴むことができた。注目されるものとして明応2年(1493)の紀年銘の護符がある。包含層出土遺物であるが、本城跡の機能した時期や、同層位から出土した遺物類に実年代を考える資料を得ることができた。さらに第2~4次調査では、詰から二ノ段にかけての山城部分調査が実施されている。二ノ段で特に遺構が集中して検出され6棟の掘立柱建物跡中でも2間×7間の大規模な掘立柱建物跡は注目された。長宗我部地検帳をみると、城内に詰・北蔵ノタン・政所ノタンなどの記載がみえ城跡内の空間構造や建物の性格及び機能等を考えていく上で貴重な資料を提供した。さらに今回の第5次発掘調査の契機となった虎口部分の一部を検出した。

吾南平野における歴史的環境を述べるとき、芳原城跡は重要な意味を持っていると考えられる。吉良氏の居城は、弘岡に所在する吉良城跡が通説となっている。しかし本山氏支配後の吉良城跡は縄張り図からみても本山氏本城の朝倉城跡と同じ縄張りが確認でき居城としたことが窺われる。その後長宗我部氏も同様である。しかし国人として成長してきた吉良氏の居城は、この芳原城跡ではないかとの疑問がわいてくる。芳原城跡は、標高32.4mの独立丘陵に構築されている典型的な平山城で、8ヶ所の曲輪で構成されており現地形では堀切や堅堀の遺構は確認できていない。規模としては、今回の山城部分のみでは他の城跡と比較すると小規模で防御施設も貧弱である。しかし、北堀を挟んで北西側には捨ヶ森城跡が存在しており、現在芳原城跡の支城とされているが立地的に芳原城跡の一部と考えれば、規模的に吾南平野のなかでは大規模な城郭となる。現在城跡の北西部を東西に大規模な農道が走っているが、小字では北堀になっており北西側に隣接して位置する捨ヶ森城跡との関連を考えざるを得ない。さらに城跡内の建物跡群やその性格、出土遺物の豊富さが吉良氏のイメージを彷彿させるのである。特に堀状地形部分から出土した木製品類や輸入陶磁器群は岡豊城跡の出土内容よりはるかに密である。芳原城跡は、城としての機能が停止する時期を出土遺物から考えると、16世紀の第2~3四半期の時期に考えることができる。この時期の吾南平野における社会的背景は、本山氏の攻撃により吉良氏が滅ぼされるという歴史がある。芳原城跡は、本山氏と吉良氏の攻防の中、本山氏が吾南平野を支配する頃廢城となっていることが考古学的調査から解明されている。芳原城跡が、吉良氏の居城であるかどうかの問題点は今後の課題としておきたい。

第Ⅲ章 城跡の概要

城跡の概要及び各曲輪の概略は、芳原城跡Ⅱの報告書に掲載しており重複する。ここでは、前回までの調査成果から長宗我部地検帳記載のホノギと検出遺構から、曲輪の空間構造と機能分化について若干述べていき城跡の概要に変えたい。

芳原城跡は、大きく8ヶ所の平坦部（第3図）から構成されており、I・II曲輪の調査が実施されている。この部分の長宗我部地検帳は、芳原城跡について以下のように記載されている。

詰ノタン

一、四十四代式歩 下々定芝荒
同 同村 鶏冠木口
木津賀古城 左京進殿御分

北藏ノタン

一、廿壱代 下々定芝荒
同 同村 同じ
同じ

政所ノタン

一、壱段七代三歩 下々定芝荒
同 同村 同じ
同じ

弓場ノタン

一、壱段六代 下々定芝荒
同 同村 同じ
同じ

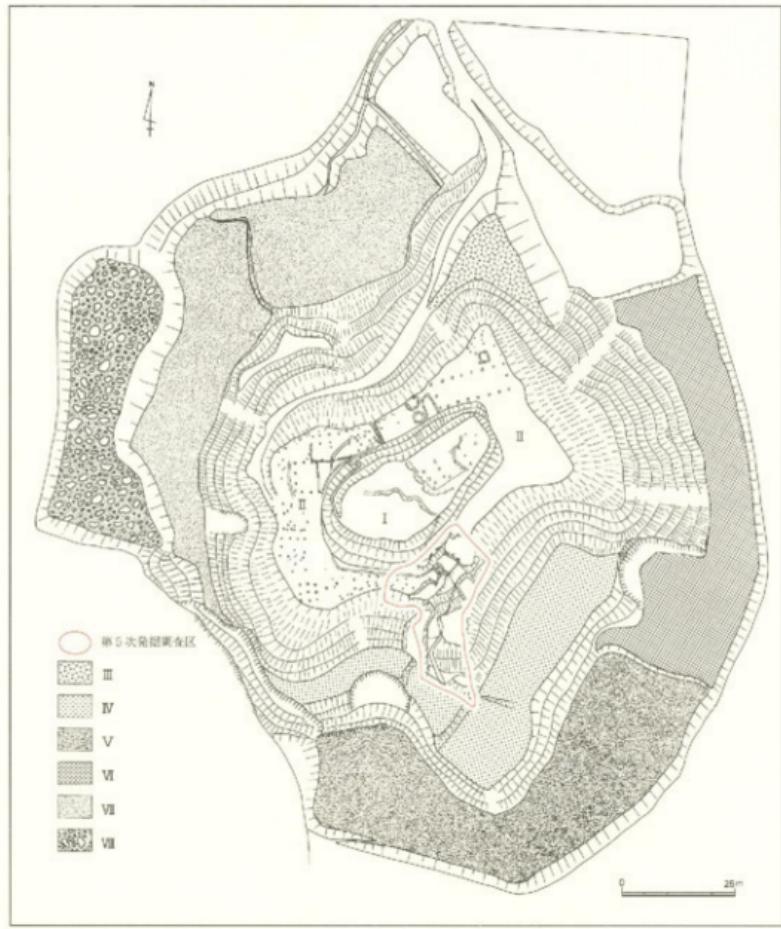
北堀フチ

一、九代 下々定芝荒
同 同村 同じ
同じ

南二ノヘ

一、参十五代 下々定芝荒
同 同村 同じ
同じ

天正17年（1589）2月に芳原城跡を検地した記録であるが、この段階ではすでに荒れた土地となっていることがわかる。地検帳に記されているそれぞれの「タン」が現平坦



第3図 芳原城跡概要図

部のどの部分にあたるかは現段階では不明である。しかし第2～4次調査の詰から二ノ段にかけての調査成果で、ある程度の推測が可能となった。詰ノタンのみは確実にI曲輪であることは間違いない。調査成果では、平坦部の北東端に掘立柱建物跡と柵列跡を検出している。遺物を見ると、銅碗や硯が出土しており詰の建物跡の性格を考えるに貴重な資料となっている。さらに瀬戸・美濃系陶器や在地産の土器類を見ると、15世紀で

も古相段階のものが出土しており詰が城跡の曲輪中でも古い段階から利用されていたことがわかる。詰の南西部は遺構が検出されておらず広い空間を有している。この空間からは、虎口部分を含め見渡すことができ防御面や攻撃面で重要な位置を占めている。この空間は、兵だまりとしての空間機能を持った場所として理解している。二ノ段は詰を取り巻く比較的広い曲輪であるが、この場所が地検帳で記載されている北蔵ノタンや政所ノタンに比定できる可能性がある。調査成果として、二ノ段から掘立柱建物跡6棟と柵列・土坑・溝跡等が検出されている。建物跡の配置であるが、詰からみて南東部において2間×2間と3間×4間の総柱の建物跡を検出している。この建物跡は、総柱ということからその性格は倉庫類を想定できる。地検帳で北蔵ノタンの名称が記載されているが、この倉庫と類推される建物付近が想定できるのではないかと考えた。しかし名称的に北蔵となっている点が疑問とされている。詰部分から方向的にみると南側部分になるが、城跡の主屋敷と考えられるV曲輪や「大門」の小字が残る地点から見たら北の方向であり、当時この蔵のある場所は「北蔵」と呼ばれていた可能性もある。北蔵ノタンの次に記載されているのは政所ノタンである。土佐の中で「政所」の研究が行われているが、城郭内で「政所」のホノギが残る場所としては唯一この芳原城跡のみである。調査区のなかで総柱の建物が所在している場所が北蔵ノタンと想定すると、隣接して検出した建物群が政所ノタンではないかと考えた。この建物群の中心となるものとしては、2間×7間の大規模な建物跡を想定した。現在県内の発掘調査された城郭のなかで、これ程大規模な掘立柱建物跡は検出されていない。この建物跡は、曲輪のなかで特別の施設と考えなければならないが、西側には覆層の付く土坑が付属している。さらに南側には土坑を2基検出しており、比較的まとまって土師質土器が出土している。この土坑の南側に3棟の掘立柱建物跡が検出されている。詰を取り巻くこの曲輪で、これら建物跡が集中するのは西側から北側部分である。

政所ノタンから弓場ノタンへ検地では移っている。弓場ノタンは、Ⅲ曲輪を想定している。Ⅲ曲輪は、近年の畠地造成工事によりその半分が削平されている。残っている部分にトレンチ調査を実施したがピットを検出することができた。これらのことから建物跡が存在していた可能性は強い。現況は約400m²の平坦地であるが、造成前の状況を想定すると約1000m²程の平坦地であった。弓場ノタンの記載は、「壱段六代」であるから約1176m²である。Ⅲ曲輪とする造成前の平坦地は、この数値からも弓場ノタンの可能性が強い。さらに2間×7間の大規模な建物跡からⅢ曲輪は隣接しており政所ノタンから弓場ノタンに移動し検地が行われたものと考えられる。

第Ⅳ章 調査の概要

第1節 調査の方法

平成5年度の調査対象範囲は、II曲輪東側の虎口部分から東側斜面部分を実施した。調査方法は、前年度までの調査方法を踏襲し、調査対象範囲全域を20m方眼で分割し、基準方位をN-45°-Eとしほば地形に沿ってポイントを設定した。調査区は、大きく20×20mで区切り東西を西からA→B→Cとし南北を1→2→3で区分し、その中に4×4mの小区画を25区作り小区画の名称を北西隅の交点番号でA1-1~A1-25とした。調査は、斜面部分が多いため地形に沿って土層観察用の畦を残しながら掘り進めた。今回の調査範囲は、H7-25区からJ9-6区の中に入る。

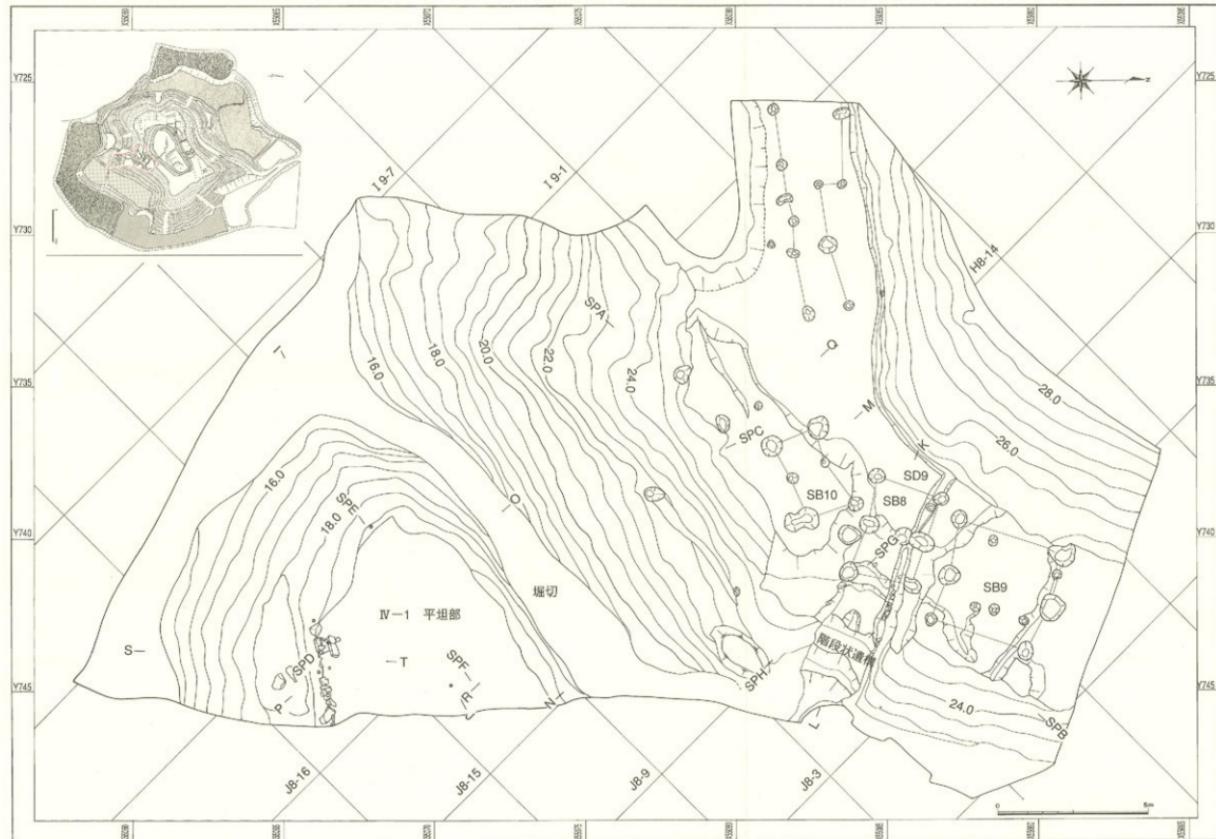
調査対象範囲の伐採終了後、調査前の写真撮影及び地形測量を1/100で作成し、発掘区については土層断面図及び遺構・遺物の検出状況の半断面図(1/20)、調査後では、斜面部も含めて全体の航空測量と航空写真的撮影を実施した。

第2節 第1~4次調査の概要

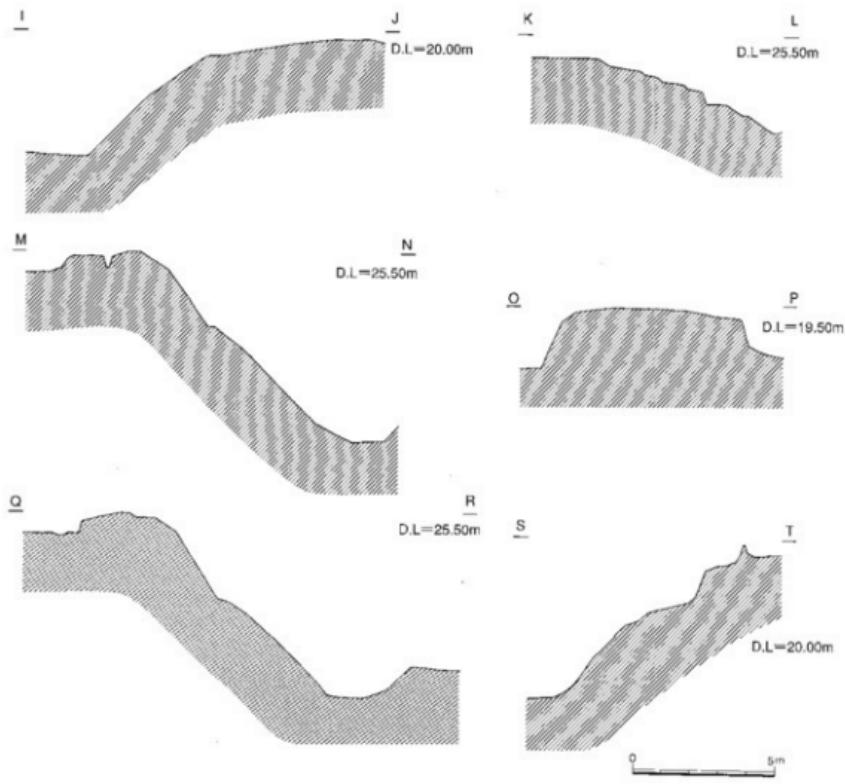
芳原城跡は、昭和58年に山城周辺の堀状地形部分を調査している。この調査を芳原城跡全体の第1次調査とした。調査地点が堀状地形部分という性格上、大量の木製品が出土した。出土遺物から、城跡内で軍事的側面以外に周辺も含めた人々の生活史の側面も捉えることができた。山城部分の調査は、平成2年度から4年度にかけて実施している。平成2年度を第2次調査とし、平成3年1月24日から3月20日までの期間で詰のI曲輪を中心とした全面発掘を実施し、II曲輪は遺構確認のため部分的にトレンチ調査を実施した。I曲輪の北部では、岩盤をL字状に掘削し平坦部を形成してから2間×3間の建物跡を構築している。さらに建物の東側には、柵列を巡らしている。建物跡の上面には炭化物の集中が広く認められ火災に遭遇していることが分かる。出土遺物では、硯や銅鏡が出土しておりI曲輪の建物の性格を窺い知ることができるものである。

平成3年度に第3次調査を実施した。第2次調査から約1ヶ月後に再開し、4月22日から6月20日まで実施した。II曲輪の南部と隣接する南西部、さらに北部の地点を調査した。南部では2間×2間の総柱建物跡とさらに西側に隣接して建物跡を検出した。

II曲輪の南西部では、建物跡2棟とそれに付属する雨落溝と考えられる溝を検出した。北部では2間×7間という城跡の中では最大規模の掘立柱建物跡や、この建物跡に付属した土坑等を検出した。第2次調査は、II曲輪の約西半分の調査であったが掘立柱建物跡を合計5棟検出したことになる。北部で検出した大規模な建物跡は、第3次調査で最も注目された遺構であったが、遺構面から貿易陶磁器の青磁や染付に混じって赤絵の碗



第4図 調査区造構全体図



第5図 調査区エレベーション図

が出土した。赤絵の出土は、県内の中世遺跡から出土することは稀で、その他の貿易陶磁器出土も合わせてこの建物の性格を推測するに必要な資料となった。

平成4年度は、10月1日から12月19日まで第4次調査として実施した。調査は、Ⅱ曲輪の残りの部分を行いⅠ曲輪の東側斜面部分も実施した。検出遺構の中で注目されたのは、東側中央部分に於いて虎口を検出したことである。城跡東側部分のⅣ曲輪から現在でも登山道が残っているが、その登りつめたⅡ曲輪の部分で検出した。第4次調査では、虎口の一部分しか調査できなかつたためその全容は不明であった。

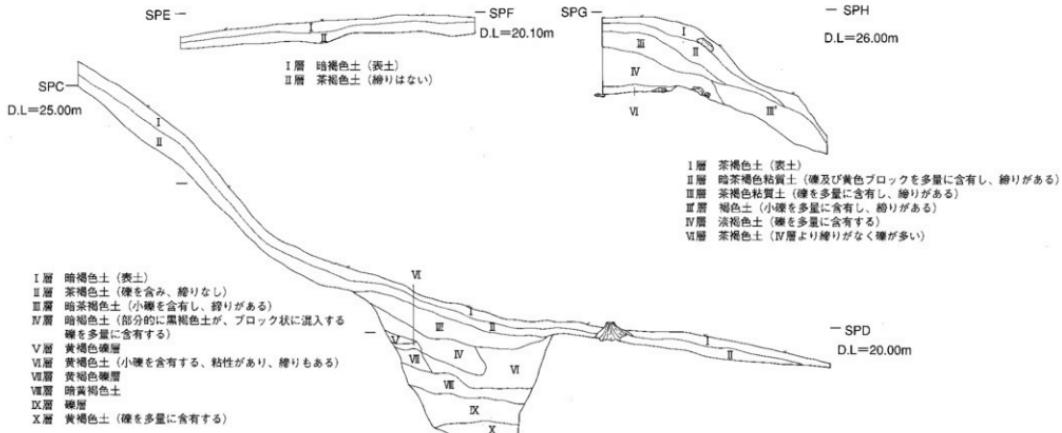
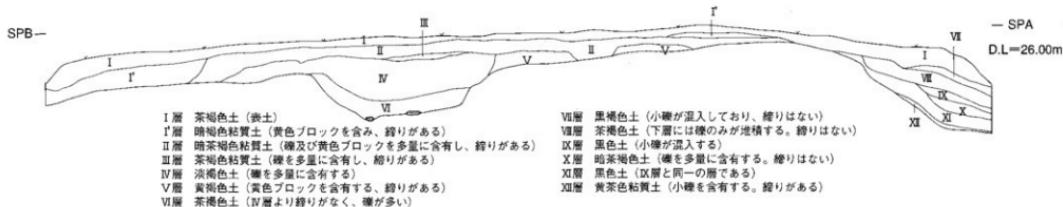
第2次調査から第4次調査まで調査概要を述べてきたが総面積は3500m²である。前回までの芳原城跡の調査を概観すると、中世の平山城としては県内の他城跡では類例を見

ない遺構・遺物を検出したことがある。遺構は現代のみかん畑で破壊されている部分があるにしては全体的に見ると良好な残りと言えるであろう。さらに遺構を見ると、すべて土造りで城跡を構築しており、石造りの中村城跡や岡豊城跡と比較検討すると高知県の中世城郭の変遷を考えて行くうえで貴重な資料を提供できた。さらには出土遺物では、第1次調査の堀状地形部分調査で大量の木製品が出土しており、今回の山城部分の遺物と合わせて土器・陶磁器だけでは語ることができない中世城郭の姿を浮き彫りにすることができたものと考えられる。

第3節 基本層序（第6図）

今回調査区で設定した部分はII曲輪の南側部分である。II区の全体的な基本層序は、I層茶褐色土とII層の黄褐色土からなる堆積状況である。しかしII曲輪の北部、南西部、南部と若干の相違が認められ、虎口部分も同様である。今回は、虎口部分を中心として東西・南北の断面層序を説明していくことにする。

虎口部分の東西断面は、I層が表土層で茶褐色土、I'層暗褐色粘質土、II層暗茶褐色粘質土、III層茶褐色粘質土、IV層淡褐色土、V層黄褐色土、VI層茶褐色土である。IV層とVI層は、虎口の枡形空間に堆積している土層である。これらの層は、礫を多く含有し締まりがない。東側部分に堆積しているIV層は、黄色ブロックを含有し締まりのある層である。SPAに近い西側斜面は、流れ込みで厚く堆積している。VII層黒褐色土、VIII層茶褐色土、IX層黒色土、X層暗茶褐色土、XI層黒色土、XII層黄茶色粘質土である。VII層からXI層までは、小礫が混入し締りのない層である。南北断面は、SPG～Hの間しかセクションを図面化することができなかったが、基本的な層序は東西の土層堆積状況と同様である。SPHに近い斜面で、III'層として褐色土（小礫を含み締りなし）が堆積している。IV-1とした平坦部は、2層堆積しておりI層暗褐色土、II層茶褐色土である。



第6図 調査区土層断面図

第V章 調査の成果

第1節 検出遺構

今回調査したII曲輪の南東部は、詰から派生する岩盤を平坦に削平し虎口部分を作りだしている。虎口部分には、城門と考えられるSB8の建物を構築している。一辺2mの枠形空間を作り、その両端は一段高い平坦部を形成している。東西両端の壇状地形には、SB9・10の建物を構築している。SB8の建物から、斜面下には階段状の遺構及び側溝のSD9を検出した。これらの諸遺構は、虎口遺構としての一部分を構成していると考えられるがここでは各々遺構の説明をして行くこととする。その他、虎口部分とIV-Iとした平坦部の間には堀切を検出した。

1. SB8（第7図）

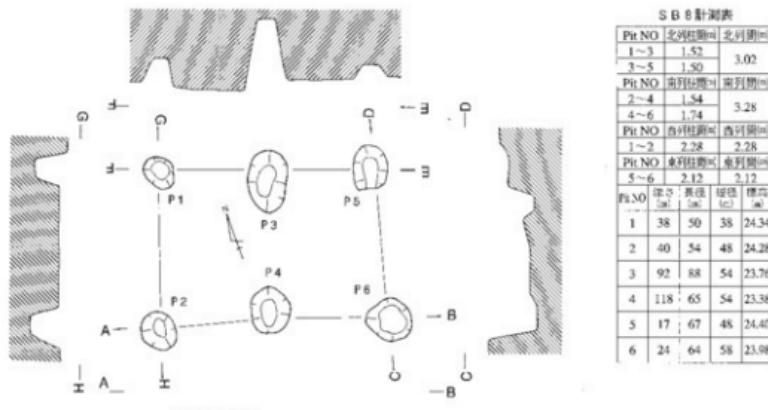
調査区の虎口部分H8-10区、I8-6区において、最下層のVI層を除去した段階で検出した。建物の規模は、1間×2間で棟方向をN-71°-Wにとる東西棟である。柱穴西側列は2.28mで、東側列は2.12mを測る。柱穴北側列は3.02mで、南側列は3.28mを測る。柱穴の掘り方は、円形から楕円形を呈し中央部の柱穴が大きい。柱穴の深さは、中央部の柱穴が深く92cmと118cmを測る。柱穴の埋土は1層で、茶褐色土である。出土遺物は皆無である。

2. SB9（第8図）

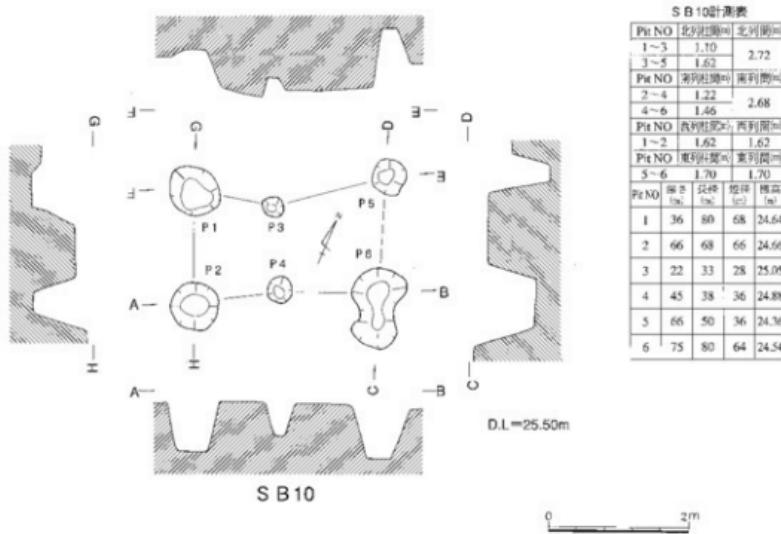
調査区の虎口部分H8-5区、I8-1区周辺において、最下層のIV層を除去した段階で検出した。建物の規模は、1間×2間で棟方向をN-71°-Wにとる東西棟である。東西の中間柱が欠損している。柱穴西側列は3.6mで、東側列は3.3mを測る。柱穴北側列は3.42mで、南側列は3.4mを測る。柱間寸法は、北側が1.6～1.82m、南側が1.54～1.86mを測る。柱穴の掘り方は、円形から不整楕円形を呈し中央部の柱穴が大きい。柱穴の深さは、26～60cmと北側列の柱穴が深い。柱穴の埋土は1層で、茶褐色土である。出土遺物は皆無である。

3. SB10（第7図）

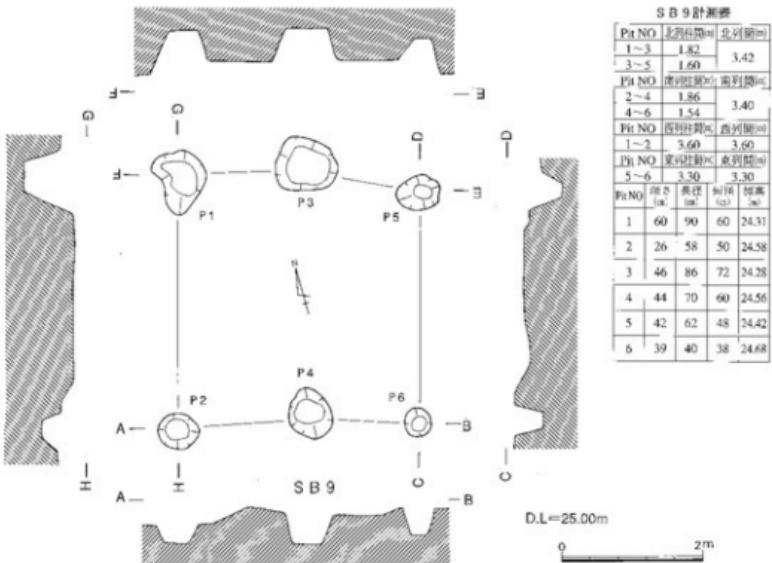
調査区のSB1の南側に位置し、I8-6区、I8-11区周辺において、最下層のV層を



S B 8



第7図 S B 8・10実測図



第8図 SB 9 実測図

除去した段階で検出した。建物の規模は、1間×2間で棟方向をN-68°-Eにとる東西棟である。柱穴西側列は1.62mで、東側列は1.7mを測る。柱穴北側列2.72mで、南側列は2.68mを測る。柱間寸法は北側が1.1~1.62m、南側が1.22~1.46mを測る。柱穴の掘り方は、円形から不整楕円形を呈し中間柱の規模が小さい。柱穴の深さは、中央部の柱穴が浅く22~45cmでその他は36~75cmと比較的深い。柱穴の埋土は1層で、茶褐色土である。出土遺物は皆無である。

4. 階段状遺構（第9図）

城門と考えられるSB 8の建物から、東斜面にかけて地山を削平し階段状に造りだしている。階段状遺構の長さは、Iの平場の西端からVIの平場の東端まで7.8mを測る。Iの平場は、2.44mの長さでI曲輪の斜面下にあたりL字状に南に屈曲している。踏み面の幅は、1.3mで底面の標高は24.62mを測る。IIの平場からの蹴上げは、30cmである。IIの踏み面の幅は1.7m、長さ0.94mを測る。IとIIの蹴上げ両端部はSB 8の中央柱部分に

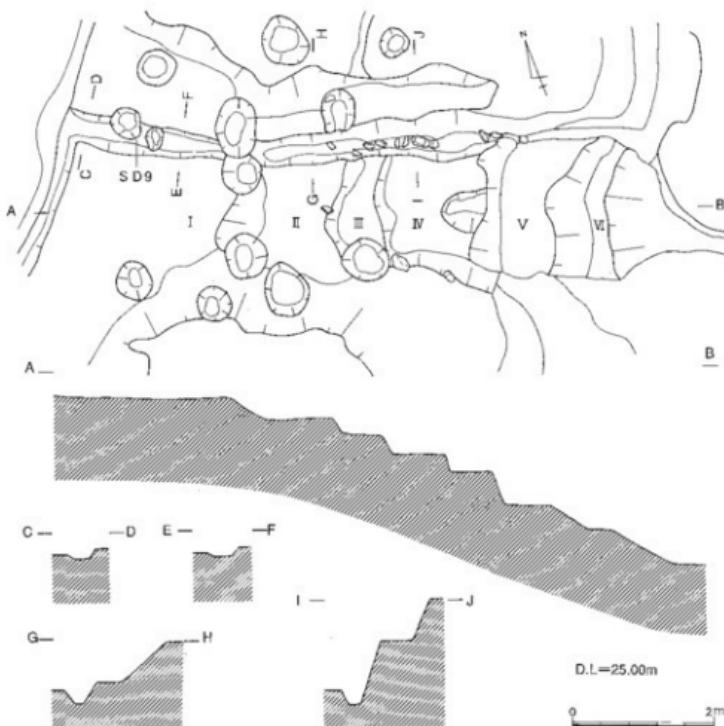
なる。Ⅲからの蹴上げは、25cmである。Ⅲの踏み面部分の幅は、南端の柱穴にあたり1.2mと狭くなり長さも0.5mと短い。Ⅳからの蹴上げは、29cmである。Ⅳの踏み面は、Ⅱと同規模に削平されている。踏み面の規模は、幅1.5m長さ1.4mを測る。東側端部は幅0.6m長さ0.54mの範囲で、深さ20cmの窪みを有している。Vからの蹴上げは、窪み部分まで48cmを測る。Vは、Ⅲと同規模に削平されており踏み面の幅1.9m、長さ0.64mを測る。VIからの蹴上げは、36cmである。VIの平坦部は、狭く幅2m、長さ0.24mを測る。VIより東下部は斜面となり階段状の削平部は検出できなかった。VIの底面の標高は22.65mを測る。

5. SD 9 (第9図)

階段状遺構の北端部に沿って、東西方向の溝を確認した。この溝は第4次調査で検出したSD 7から続く構造で、詰の斜面下の周囲を回る溝と考えられ、詰の南下端部でSA 3に並行して走り、虎口部分で屈曲し階段状遺構の側壁にいたっている。溝の規模は、長さが屈曲部から8mで、幅は西側で45cmを測り東下端に延びる程狭くなり、階段状遺構のIVの平場付近で消滅している。Ⅲ～IVの平場付近の溝底面には、20～40cmの礫が散在している。深さは20～30cmで、埋土は茶褐色土の単層である。出土遺物は皆無である。

6. 堀切 (第4図)

堀切は、虎口遺構の南側斜面から、IV-I平坦部の間でI-8・13・18・23区においてII層を除去した段階で検出した。調査前は、縄張り調査でも堀切は確認できず虎口部分からIV-Iとした平坦部の間で南斜面にかけて堅堀を想定した。さらに調査前まで、IV-Iの平坦部南側斜面から虎口に登る道が利用されていた。堀切の規模は、長さ13m、幅は上端で3.4m下端部の中央部で1.2m、北側で2.4m、南側で1.7mを測る。掘り方は、箱堀りを呈しており、底面の標高は中央部17.1m、東側は19.0mと高く西側は15.6mと低くなっている。堀切部の層序は、I層は表土層でII層は茶褐色土である。埋土は、III層からX層まで堆積している。III層は、暗茶褐色土（小礫を含有し締りがある）、IV層暗褐色土（部分的に黒褐色土がブロック状に混入し、礫を多量に含有する）、V層黄褐色礫層、VI層黄褐色土（小礫を含有し粘性と締りがある）、VII層黄褐色礫層、VIII層暗黄褐色土、IX層礫層、X層黄褐色土（礫を多量に含む）である。



第9図 階段状造構・SD 9 実測図

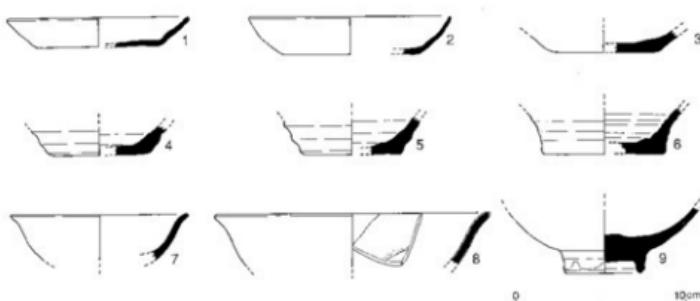
7. IV-1 平坦部（第4図）

堀切の南側に位置する平坦部である。標高19.5m前後で平坦部を造りだしている。2層が堆積しており、I層表土層で暗褐色土、II層茶褐色土でその下は岩盤となっている。この平坦部では、遺構は検出できなかった。南側端部で30~50cm代の自然礫の配石を検出したがI層の表土層中に配石されているので近世以降の時期と考えられる。平坦部の形状は、半橢円形状を呈する。規模は、南北7.2m東西6.0mを測る。

第2節 出土遺物

今年度の調査は、範囲が狭く出土遺物も数少なく細片が多い。出土遺物の総破片数は、実測遺物も含めて87点（近世陶磁器5点を除く）である。出土遺物の内訳は、土師質土器70点、備前焼11点、貿易陶磁の青磁3点、白磁1点、染付1点、産地不明陶器1点である。包含層のⅡ層とⅣ層から土師質土器の出土が多い。前回までの調査では、出土総点数の中で土師質土器が93.6%、国産陶器類が4.2%、貿易陶磁が1.6%を占めており、今回も比率的には同じ数値を示している。実測可能な遺物は、8点であるが詳細を述べていくことにする。

1~6は、土師質土器である。1は皿で、SB8の建物が位置する地点のⅢ層から出土している。復元口径10.5cm、器高1.8cm、底径7.2cmを測る。平坦な底部から、口縁部にかけて直線的に立ち上がる。体部内外面ロクロナデ調整である。底部外面は回転糸切り痕が残る。胎土の焼成は良好で、色調は橙色を呈する。2も同様に皿である。出土地点は1と同じⅢ層である。復元口径11.6cm、器高2.2cm、底径7.9cmである。平坦な底部から、口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。内外面ロクロナデ調整である。底部外面は回転糸切り痕が残る。胎土の焼成は良好で、色調は橙色を呈する。3~6は、土師質土器杯である。すべて底部破片である。虎口部分のⅣ層からV層にかけて出土している。復元底径は、3が6.1cm、4が6cm、5が5.7cm、6が7cmを測りやや底部の径が広いタイプである。ロクロナデ調整で外面にロクロ痕が残るものも認められる。底部はすべて回転糸切りである。色調は浅黄橙色で焼成はやや不良である。7~9は貿易陶磁で虎口部分のⅢ層・Ⅳ層出土である。7は白磁の端反り皿で底部が欠損しており復元口径10.4cmである。釉調は灰白色で貫入は認められない。8は青磁碗で口縁部破片である。復元口径は16cmで、口縁部がやや外反する特徴がある。外面は無文であるが、内面には片切り彫りの線刻が確認できる。釉調はオリーブ灰色で、断面は灰白色である。貫入は認められない。9は青磁碗の底部破片である。高台径は4.7cmで、高台外面まで施釉され外底は露胎である。疊付けは外面を削り狭くしている。釉調は灰オリーブ色で、貫入が入る。断面の色調は、浅黄橙色である。



第10図 出土遺物実測図

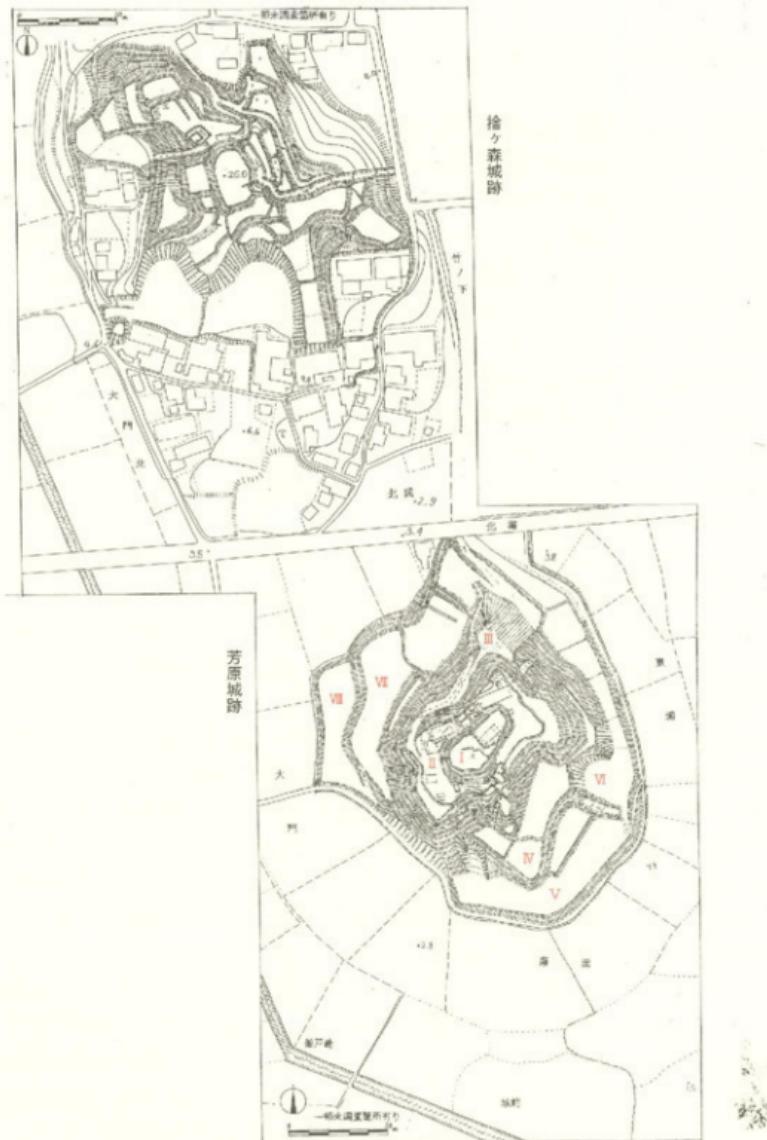
第VI章 考 察

1 芳原城跡の調査成果と問題点

芳原城跡は、標高32.4mの独立丘陵に構築されている典型的な平山城で、8ヶ所の曲輪で構成されており現地形では堀切や堅堀の遺構は確認できていない。さらに古くは、明治年間の記載でも詰とそれを取り巻く曲輪の存在が紹介されている。¹¹⁾ 規模としては、今回の山城部分のみでは他の城跡と比較すると堀切等の防衛施設の遺構が少なく、標高も低い独立丘陵に構築された小規模な城郭に見える。しかし、北堀を挟んで北西側には捨ヶ森城跡が存在しており、現在芳原城跡の支城とされているが立地的に芳原城跡の一部と考えれば、規模的に吾南平野のなかでは大規模な城郭となる。

芳原城跡は、圃場整備にともない昭和58年度に第1次調査として堀状地形部分の調査が実施されている。¹²⁾ 明確な堀跡の痕跡は確認できなかったが、多量の木製品と土器類が出土している。木製品の中で注目されるものとして明応2年(1493)の紀年銘の護符がある。芳原城跡の機能した時期や、同層位から出土した遺物類に実年代を与えることができた。さらに平成2~4年に実施された第2~4次調査では、¹³⁾ 山城部分の調査で詰から二ノ段にかけての調査が実施されている。二ノ段では、掘立柱建物跡を6棟検出しており、中でも2間×7間の大規模な掘立柱建物跡を検出している。長宗我部地検帳では、城内に詰・北蔵ノタンや政所ノタンなどの記載がみえ城跡内の空間構造や建物の性格及び機能等を考えていく上で貴重な資料を提供した。さらに平成5年度の第5次発掘調査の契機となった虎口部分の一部を検出した。

芳原城跡の歴史的位置付けを考える場合、現在城跡の北西部を東西に大規模な農道が走っているが、小字では北堀になっている地点でその北西側に隣接して位置する捨ヶ森城跡との関連を考える必要がある点は前述した通りである。さらに城跡内の建物跡群やその性格、特に政所¹⁴⁾や北蔵のタンのホノギと検出遺構がほぼ一致できる点など重要な資料を提供できた。出土遺物の豊富さにしても小規模な城郭であるならば、その位置付けを考えいかなければならない。特に堀状地形部分から出土した木製品類や輸入陶磁器群は同豊城跡¹⁵⁾や中村城跡¹⁶⁾と比較してもはるかに多い。芳原城跡は、城としての機能が停止する時期を出土遺物からみると、16世紀の中頃前後の時期に考えることができる。この時期の吾南平野における社会的背景は、本山氏の攻撃により吉良氏が滅ぼされるという歴史がある。¹⁷⁾ 本山氏と吉良氏の攻防で本山氏が吾南平野を支配する頃、芳原城跡が廃城となっていることが今までの考古学的調査から解明されている。現在高知県の歴史では、吉良城跡が吉良氏の居城であることは常識とされている。しかしここでは「吉良城跡は吉良氏の居城か?」この問題を提起しておきたい。この問題は芳原城跡の調



第11図 芳原城跡・捨ヶ森城跡縄張り図

査担当として、検出遺構・出土遺物の検討をし、芳原城跡の位置付けを考えていくうえで浮上してきた点である。今回の芳原城跡の成果から、吾南平野における中世城郭の変遷を社会的背景をも含め再考する必要性がある。

2 虎口遺構について

今回の調査で、前年度一部確認していた虎口部分や堀切等を検出した。虎口部分は全体の様相を明らかにすることができた。虎口部分の中で検出した遺構は、掘立柱建物跡、階段状造構、溝跡である。建物の中でSB8は城門と考えられ、両端で検出したSB9・10は一段高い壇状の平坦部に構築されている。SB8～10の上部構造は、何らかの関連した構造を有しているものと考えられる。SB8の内側でSB9・10の間には、枠形の空間を持っている。SB8の外側は、緩斜面になっているが1.5～2m幅で掘り窪められ階段状に削平され、標高22mラインで急傾斜で落ち込んでいる。階段状造構の下方は未調査であるが、西側の堀切が延びているものと考えられる。虎口部分から堀切をはさんだ対岸には、IV-1平坦部が形成されている。

虎口は、出入口として防衛と攻撃面を強化するため城の中で著しく発達していくものとされ、中世を通じて均一に変化発達したものではなく戦国時代後半から織豊期にかけて急速に発達したと考えられている。虎口の形態及びその変遷について、最も単純な平虎口が初現でその周辺を土塁囲みにして固められ、それと前後して虎口に至る道に折れを効かせていく。さらに発達するとこれらが複雑に絡み合って枠形や馬出が織豊期頃に出現するとされている。¹⁶⁾

現在高知県で、明確な虎口遺構が確認されている城跡として岡豊城跡がある。主郭部北西部の四ノ段北部に存在する虎口である。この虎口は、四ノ段北部の墨線際土塁が大きく南に突出し、内側の土塁と噛み合うことで造られたくい違い虎口と考えられている。さらに四ノ段北部で虎口後方の空間は、詰を中心とする曲輪群の出撃機能を占有する空間とも評価されている。突出するくい違い虎口と後方虎口空間のセットプランを有している城郭は、織豊系城郭の特徴とされている。¹⁷⁾ 岡豊城跡の虎口だけを見ても、長宗我部氏が戦国的な城郭から近世的な城郭へ主郭部分を大きく改修したと考えられる。その大改修の時期は、天正3年銘の瓦片が出土していることなどから天正3年から16年の時期をあててほぼ間違いないであろう。岡豊城跡の虎口と比べると、くい違いなど形態も異なり後方虎口空間も狭い。明らかに時期的・規模的に相違が見られる。しかし主郭部からの出撃機能や防衛的機能を高めている点は同じである。

3 曲輪構造と虎口

全国的に見ても虎口の変遷を考える上で、芳原城跡の虎口は重要と考えられその構築時期を検討していかなければならない。芳原城跡は、出土遺物から大きく15世紀中頃から16世紀中頃前後を機能した時期と想定してみたが、城館内の曲輪の機能差や性格の違いを含め検討し虎口造構の構築時期を考えてみたい。

第1次の堀状地形部分の調査では、多量の木製品を含む遺物が出土した。湿地帯を掘の機能とし、遺物類が廃棄されたと想定している。これら出土遺物は、VからVIIとした曲輪で主に使用され廃棄されたものと考えるのが妥当である。これらの曲輪は、未調査のため推定になるが木製品などの出土遺物からすると城跡内の居住空間とすることができる。さらに小字を見るとV曲輪の前面が南堀、VI曲輪が東堀、VII曲輪が北堀、VIII曲輪が大門とそれぞれ堀地名や門の名称が残る。出土遺物を概観すると、土師質土器では手づくりの製品¹⁰も見られ貿易陶磁にしても青磁で雷文帯や無文の製品で、白磁では森田編年のD類¹¹が多い。さらに染付けが少なく、木製品では明応2年銘の護符が出土している。これらの点から15世紀中頃から後半の時期に機能した時期を考えることができる。この時期にV曲輪からVIII曲輪は、生活空間としての機能を果たしていたと考えられる。

第2～4次の調査では、I・II曲輪の様相をつかむことができた。I曲輪は、掘立柱建物跡1棟と柵列を検出している。南部は広い空間を有しているが造構は確認できなかった。出土遺物は、銅椀や硯など特殊な遺物が出土しており、その他陶磁器類もみられるが常滑焼や瓦質土器などが出土しており、時期的には堀状地形部分から出土した土器群と同じである。II曲輪は、I曲輪から5～7mの比高差をもちI曲輪の周囲を取り巻く曲輪である。掘立柱建物跡を6棟検出しているが、重複関係はなくほぼ同時期に存在していたと考えられる。しかしその中でもSB7とした2間×7間の大規模な建物跡は時期的に新しくなると考えられる。虎口の構築は、城跡が機能した中で最も新しい時期と考えれば、SB7とした建物跡と同時に最後の普請で造られた可能性がある。

芳原城跡は、独立丘陵の頂上部と裾部を中心に削平する形で築城が行われ、頂上部は見張り台的な簡単な施設を造り、同時に裾部には生活空間としての場を構える。この段階の城造りには、在地集落在住者が領主を中心として、自らの生活と生産を守る目的で構築したと考えられる。¹²その後領主管理のもと集落在住者によって城は維持され、日常性の強い施設から軍事性の強い施設を造り出すため、II曲輪の削平にはいり建物群を配置していく。この段階でI～III曲輪とVI～VIII曲輪の機能差を明確にしたものと想定する。守護領国体制の崩壊にともない軍事的緊張が高まる16世紀前半で、I～IIIの曲輪はさらに軍事性の強い施設を配置し、その中で最も重要な役割を果たす虎口を最後の段階で構築したと考えている。

註

- (1) 宮地森城『土佐国古城略史全』土佐史談復刻叢書(1) 1989年
- (2) 宅間一之・山原恵三『芳原城跡発掘調査報告書』高知県教育委員会 1984年
- (3) 松田直則『芳原城跡Ⅱ－第2～4次発掘調査報告書－』春野町教育委員会 1993年
- (4) 矢野城樓『土佐の政所』高知市民図書館 1989年
- (5) 森田尚宏・松田直則・岡本桂典『岡豈城跡第1～5次発掘調査報告書』高知県教育委員会 1989年
- (6) 松田直則他『中村城跡』中村市教育委員会 1985年
- (7) 春野町『春野町史』1976年
- (8) 千田嘉博「鐵豐系城郭の構造」『史林』70-2 1987年
- (9) 前川要・千田嘉博・小島道裕「戦国期城下町研究ノート－郡山城・吉田、春日山、岡豈－」『国立歴史民俗博物館研究報告第32集』国立歴史民俗博物館 1991年
- (10) 松田直則・下村公彦「小結」「田村遺跡群10分冊」高知県教育委員会 1986年では、15世紀末まで手づくねの製品が多く出土するとされている。
- (11) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」「貿易陶磁研究 N O 2」日本貿易陶磁研究会 1982年
- (12) 横山勝栄「山間地域の小型城郭」「中世の城と考古学」新人物往来社 1991年で指摘されているように、民衆の側から城郭を考えて見た。

写 真 図 版



調査後全景（南東より）



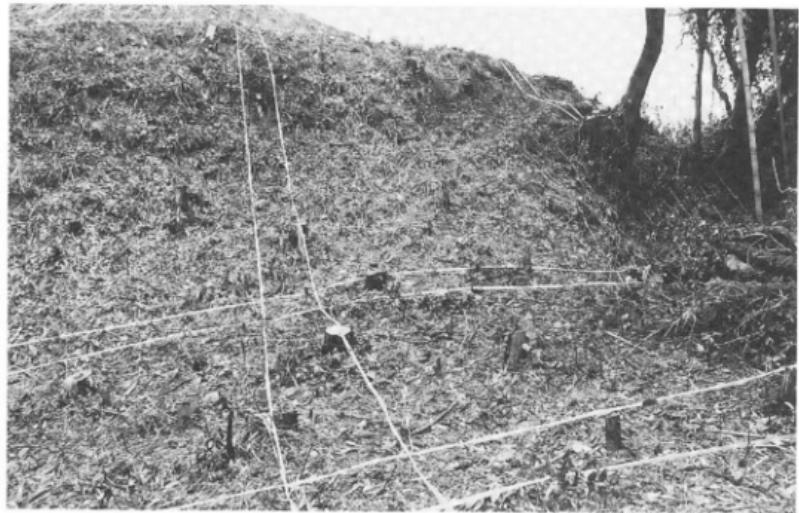
調査前状況（北西より）



同上（北より）



調査前状況（南より）



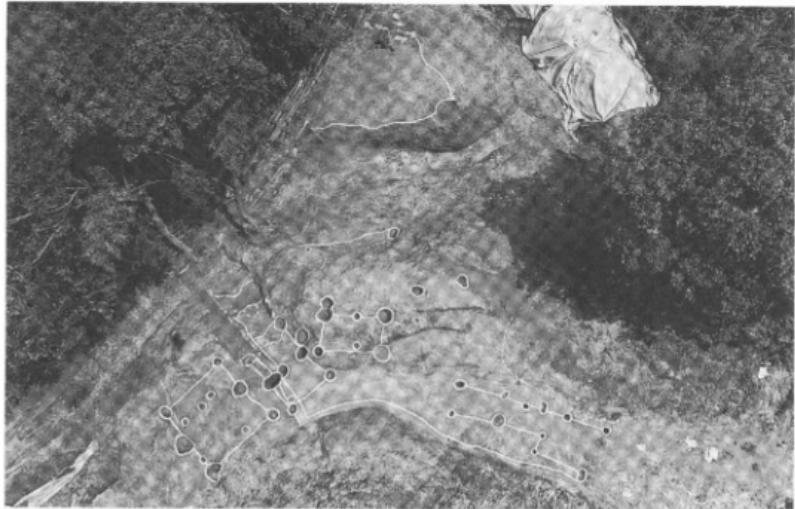
調査区設定状況（南東より）



調査区設定状況（北西より）



調査状況（西より）



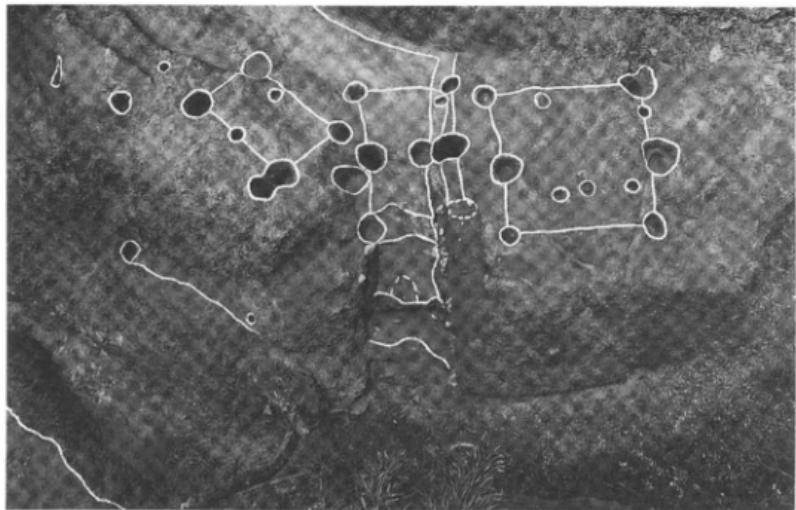
調査区全景航空写真



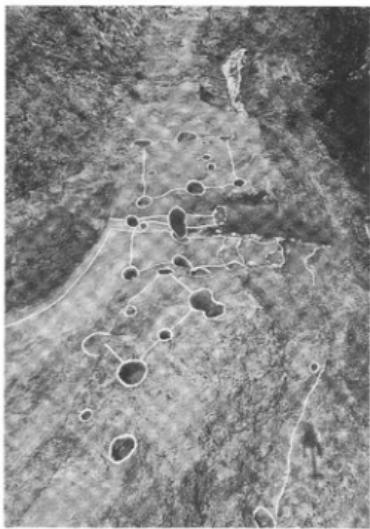
調査区全景（南東より）



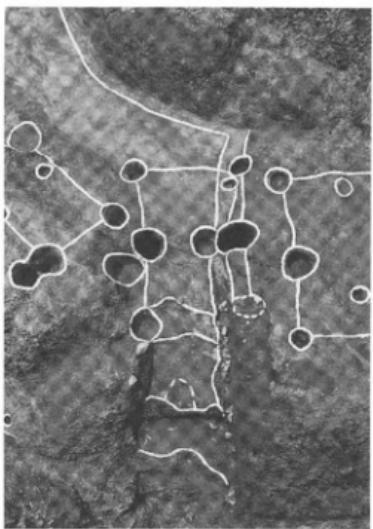
堀切・IV-1 平坦部（南東より）



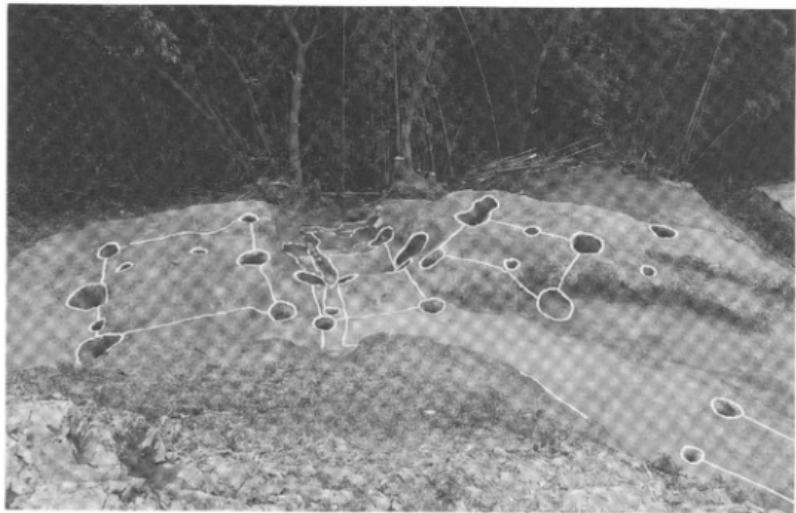
虎口部航空写真



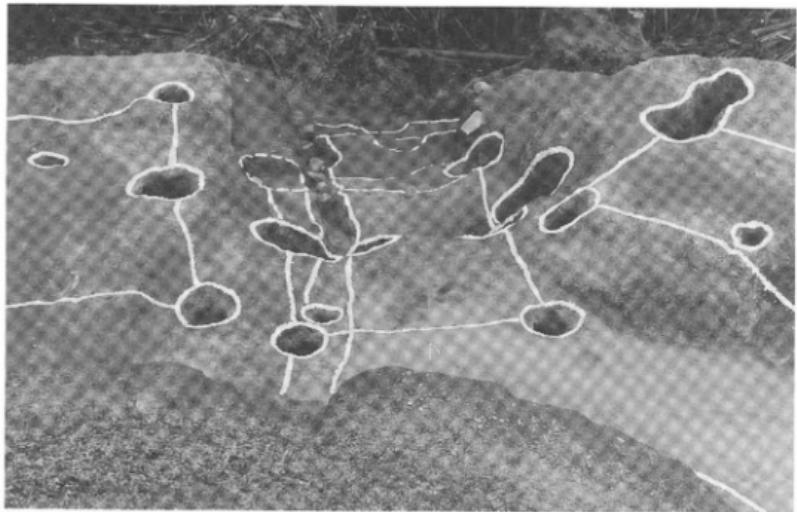
虎口部（南西より）



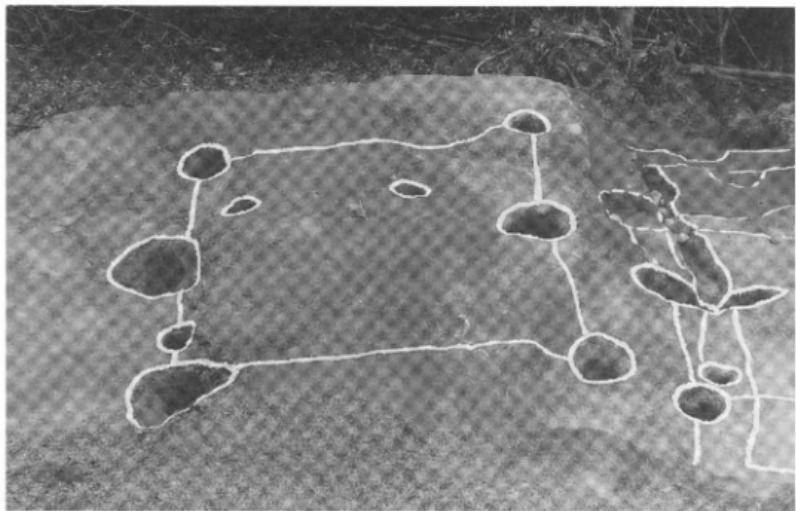
S B 8・階段状構造



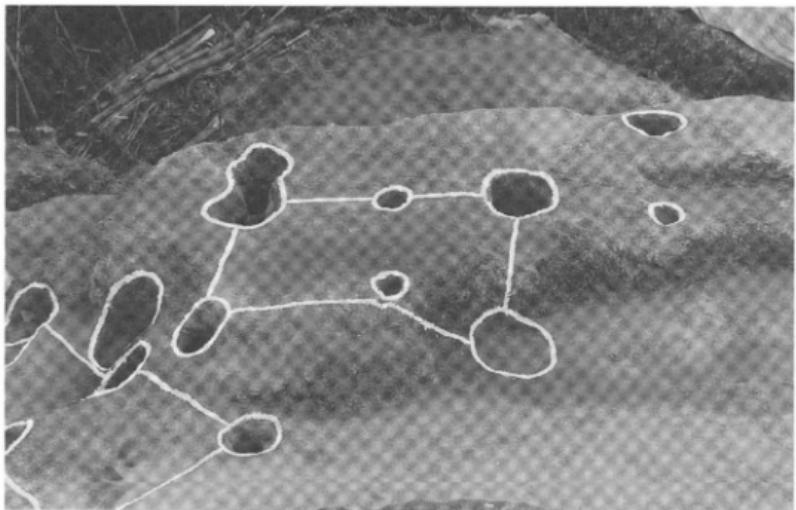
虎口部全景（北より）



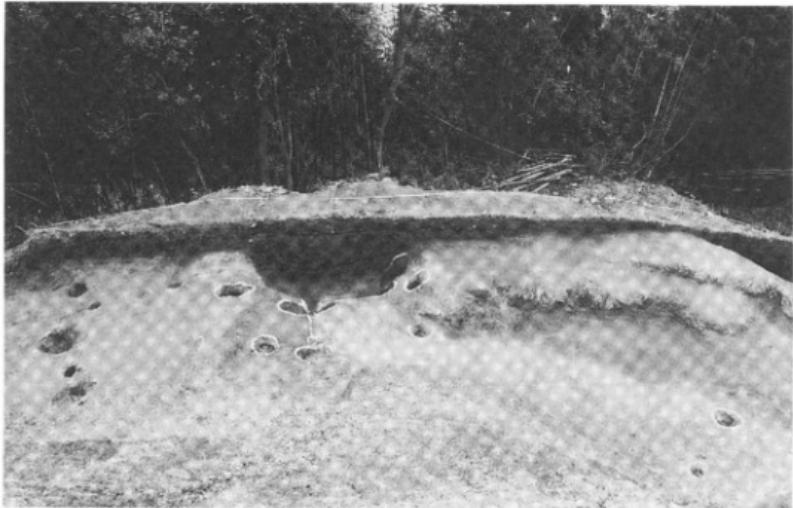
S B 8・階段状遺構



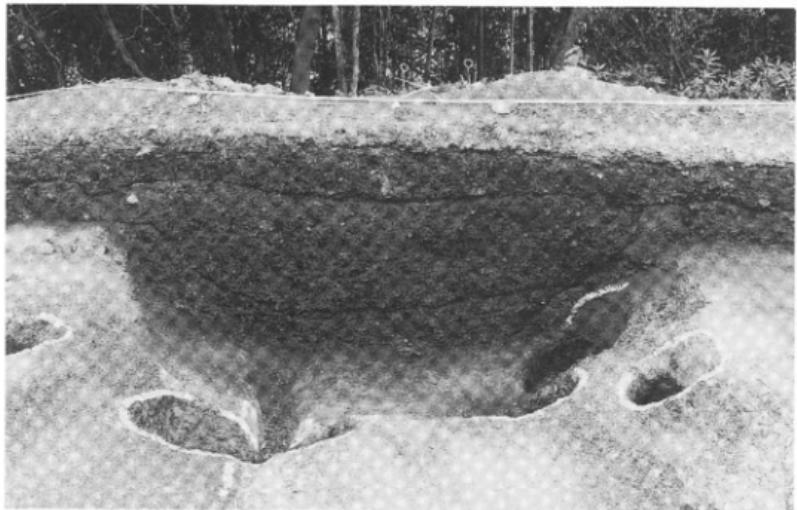
S B 9



S B 10



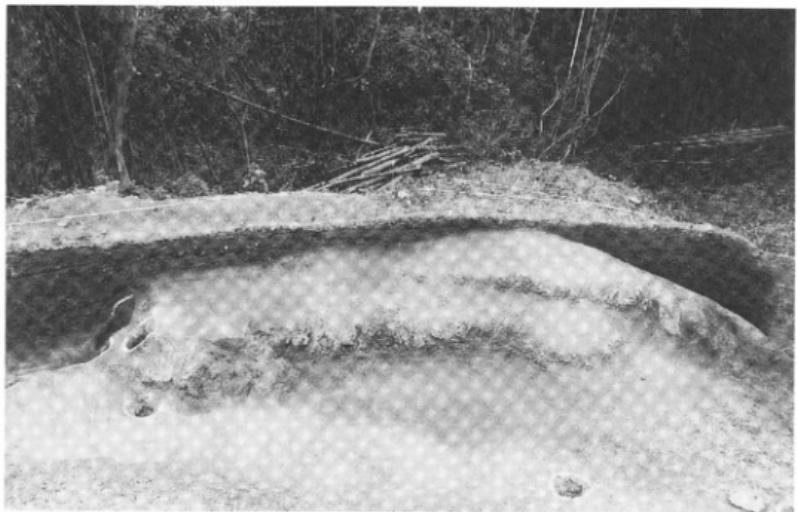
虎口部東西土層断面（北より）



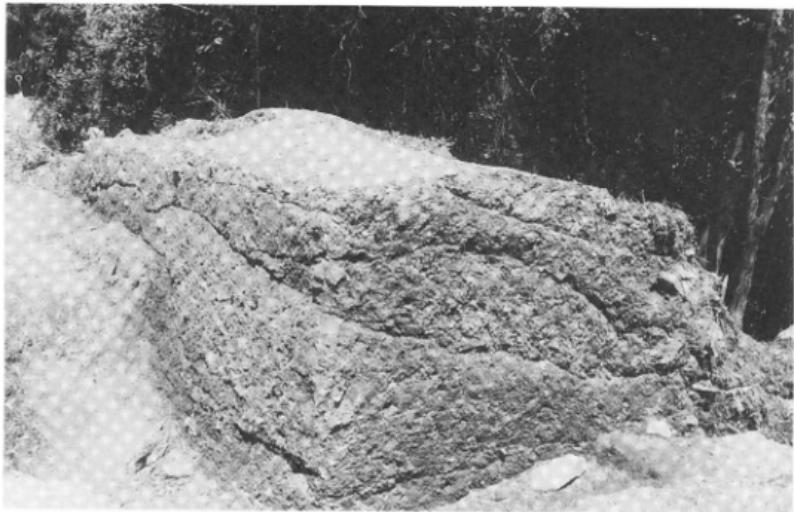
虎口中央部土層断面（北より）



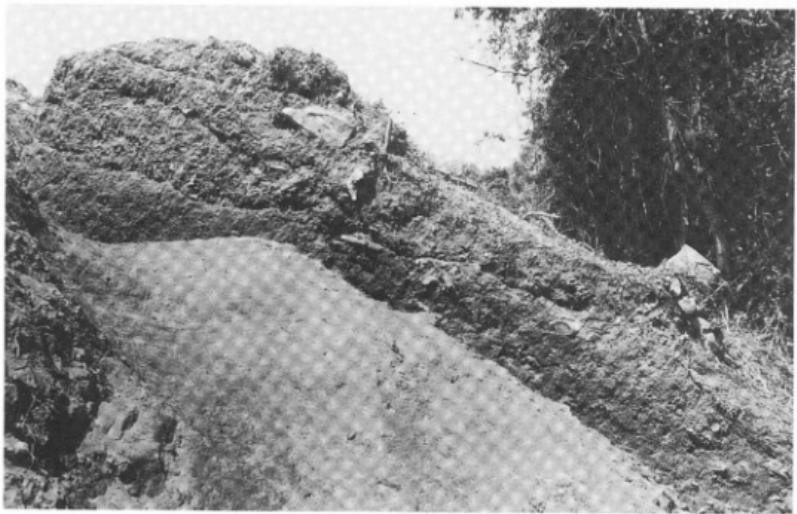
虎口東部土層断面（北より）



虎口西部土層断面（北東より）



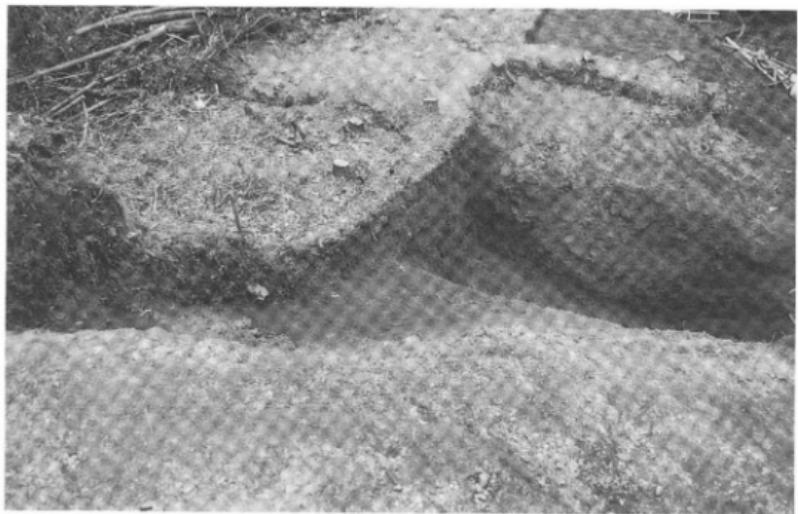
虎口中央部土層断面（北西より）



虎口斜面部土層断面（南西より）



斜面部土層断面（南より）



堀切・IV-1 平坦部土層断面（西より）



堀切土層断面（西より）



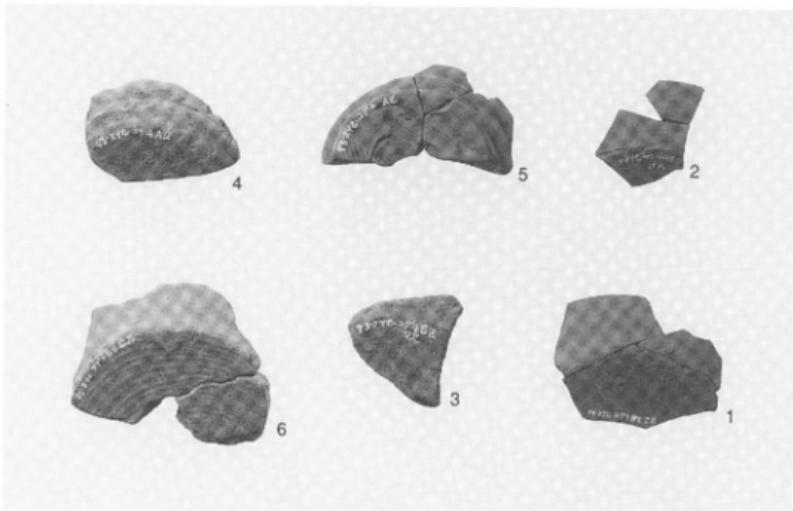
同上（南西より）



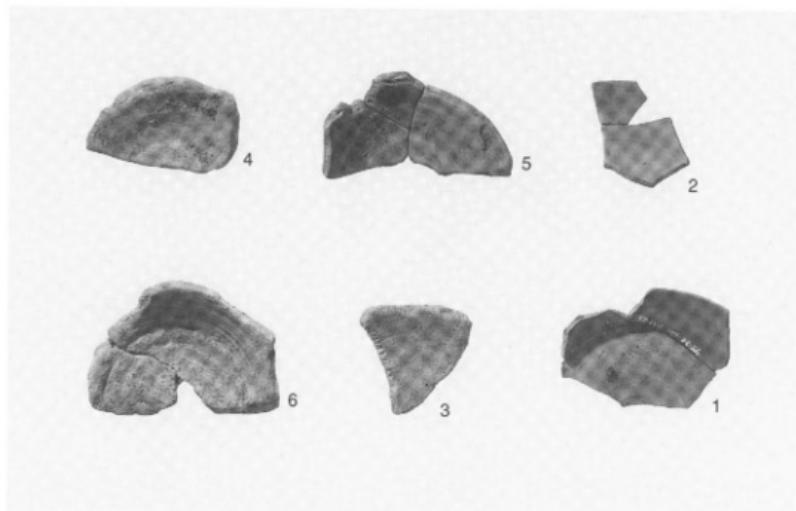
IV-1 平坦部南北土層断面（南より）



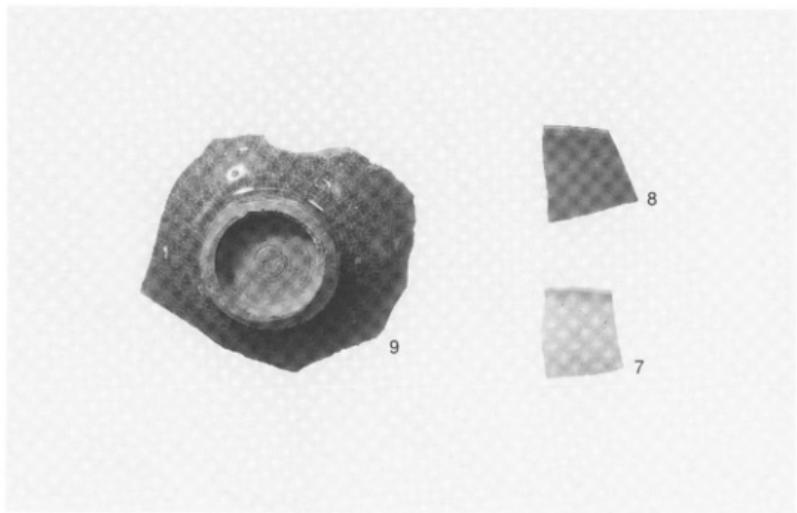
IV-1 平坦部東西土層断面（西より）



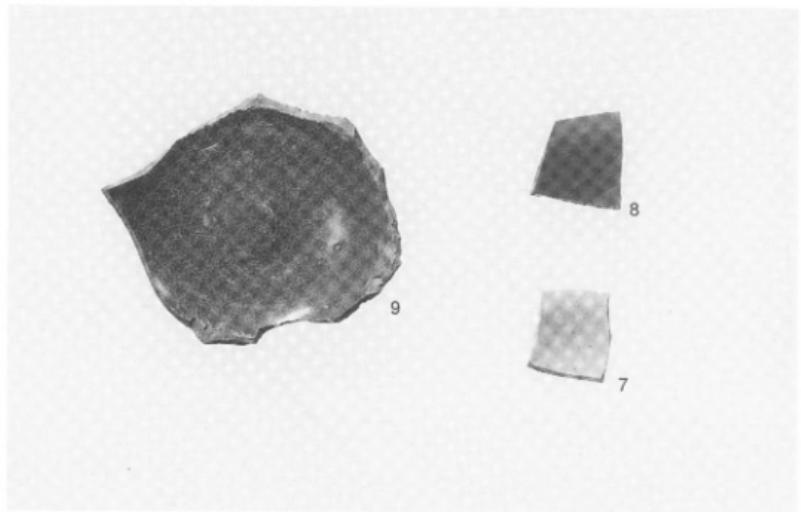
土師質土器（外面）



土師質土器（内面）



貿易陶磁器（外面）



貿易陶磁器（内面）

高知県春野町

春野町埋蔵文化財調査報告書第14集

芳原城跡Ⅲ

—第5次発掘調査報告書—

1995年3月

発行 春野町教育委員会

高知県吾川郡春野町西分15

TEL 0888-94-2311

印刷 (有)西村謄写堂

高知市上町1丁目6-4